

柏木の「身」意識について

神田 洋

一、はじめに

源氏物語の研究史において人物論は、大ざっぱな整理の仕方允許して頂けるなら、三部構成説に従って、一成果をあげてきた。なかでも柏木の人物論は、若菜上巻の始発より「岩瀨の中將柏木」から「右衛門督柏木」への昇位を、物語作者の手による「変貌」と捉え、一部の「柏木」から二部の「柏木」へと主題性を持つての登場と定義された。ここには、古代の物語を文学と対照させるかたちで捉え、源氏物語の「古典性」を明確にするという、研究的意義があったと考えている。

私は、もう一度読みにおける原点に立ちかえり、桐壺巻に始まり夢浮橋で終わる現行の源氏物語をその残された形態の流れの中で捉えてみてはと考えている。そして、この柏木についても、一部と二部の「分岐」を読むのではなく、統一体としての物語の流れにおいて読んでみるとどうなるかと考えているのである。その

意味で本論文は、私の柏木論へ向かう一端緒として位置づけておきたい。

二、源氏物語の中の「身」について

「身」という言葉は、源氏物語に「御身」も含め、六百十数例ひろいことができる。その意味として最も多いのが「身の上」としてであり、次に「からだ」や「自身」の意である。そして、その人の「位置」や「立場」（つまり位の意を含む）が使われる。

「身」を日本国語大辞典で引くと、こうある。

1 その人のからだの意から転じて、その人自身。自身。特に他人に対して、おのれ自身をいう。

「身はいやしなから、母なん宮なりける」（伊勢物語八四）
2 その人自身の有様、または位置。その人の立場。身の上。身の上さま。

「ゆゆしき身に侍れば、かくておはしますもいまいましようかた

じけなく」

(源氏物語桐壺)

3 その人自身が世に占める地位。その人自身の分限、程度。身分。分際。身のほど。

「身はしもながら ことの葉を あまつそらまできこえあげ」
(古今雑体一〇〇三)

4 命あるからだ。生命。

「残り少なしと、身を思したる御心のうちは」(源氏物語御法)

5 容器、外殻、外観などに対してなかみをなすもの。内容。実質。↓実。

「文屋の康秀は、言葉たくみにて、その様身におよばず」

(古今仮名序)

以下、検討してみたい。

まず、1の例として「身はいやしなから、母なん宮なりける」という伊勢物語八四段が引かれているが、しかし、この「身はいやしなから」の「身」は「身分」の意と考えてもおかしくはない。辞典にある「その人自身、特に他人に対して、おのれ自身」の例としてふさわしいのかどうか、少し分りにくい。「身分」ということを考えれば「位置」や「立場」の例としても受け止められるように思われる。辞典としてしようがないのであろうが、もう少し意味を限定してみてもどうかと思うところである。

2の例としては、「ゆゆしき身に侍れば、かくておはしますもいまいましくかたじけなく」と、源氏物語桐壺巻を引いている。

朝負の命婦の、帝よりの復命を携えての訪問。亡き桐壺更衣の母

ことができよう。以上「身の上」としての例は、一部から柏木巻までで一六四例を数えることができる。

次に、同じように源氏物語から3の「身分、分限」の例を抜きだしてみると、

身はしづみ(帚木三八・二二)

身のさへ(帚木五九・八)

おとりける身(空蟬九三・二二)

高き身(玉鬘七二五・一 若菜下一一七一・五)

などがある。

ところで、古代において「自我」というものが明確に認識されていたとは考えにくい。そこで古代人における、位つまり身分というものを考えてみると、そこでは古代人自身が、位としての、あるいはその身分としての自己自身を明確に捉えているわけではない。もし、そうであるならば、そこには「自我」が明確に作用していないなければならないはずである。古代においてそのように自己自身の意識の上に立つ自我が、確認されていたとは言い難い。そう考えるならば、先に引いた日本国語大辞典の説明にある、「他人に対して」の「おのれ自身」というような「身」意識が認識されていたと考えるのは難しいのである。むしろ、古代にあっては、他人即ち、自己自身と身体も分化されていず、ただ漠然とした身があり、自身があり、他人があると考えられていたのではなからうか。

辞典の4の例の「からだ」ということもそういう古代の意識の

柏木の「身」意識について

君は参内を断った。その言葉。夫にも娘にも死別した「身」が「ゆゆし」と母君は言う。確かに世間というものを意識しての言葉ではある。だが、そこには母君の主体が確実に認識されているとは言い難い。「ゆゆしき身」とは、言ってみれば夫や娘に「先立たれる」事が恥ずかしいということであり、「世間」という他者に取り込まれている自身である。辞典が示している、「身の上」が意味としてはふさわしい。例えば源氏物語では、次に示すものがその例である。

かずならぬ身(帚木四八・二三 帚木七〇・四 葵二九二・二四)

薄標五〇・一七 若菜上一〇七八・二三 若菜上一〇九四・二四

若菜上一〇九九・五 若菜上一〇七七・七 若菜下一一七七・九

若菜下一一九・三

あさましき身(賢木三三八・九)

口惜しき身(薄標五〇三・二四 若菜下一一八・二三)

かひなき身(薄標五〇五・一一 薄雲六〇・二〇)

心憂き身(若紫一七四・二三)

うき身(梅枝九九・一七 藤裏葉一〇一・一一)

つたなき身(蓬生五二八・四 松風五八五・六)

憂き宿世ある身(関屋五五・一三)

罪深き身(須磨四一八・九 玉鬘七三二・八 若菜下一一八九

・六)

身をうきものに(真木柱九六五・八)

などがあり、これらの「身」も「身の上」の意味の範疇に入れる

中で押さえておきたい。

以下、源氏物語から「からだ」の例を挙げてみると、

我が身(桐壺七・三)

身を捨てて(夕顔一二九・五)

身をふるまふ(須磨四〇三・四)

などは、確かに「からだ」肉体である。本論で問題としたことは、その「からだ」を源氏物語の人物たちがどう意識していたかである。特に柏木がどう意識していたかが、新しい問題を提起するのではと考えているのである。

そこで、「からだ」と対照的に気になる言葉に「から」がある。

た、いまのからを見ては又、いつの世にかありし形をも見む

(夕顔一二三・二)

すなわち、「から」とは「骸」のことである。他に、御法(一三九三・八)早蕨(二六七八・一〇)など合せて一二例を見いだす。「むしのから」「御から」を入れると二七である。

問題は、この「から」に近い意味で「身」が使われていやすいかということなのである。

例えば、次の空蟬巻の例。

空蟬の身をかへてける木のもとになを人からのなつかしきか

な (空蟬九四・四)

また、

面影は身をも離れず山桜心のかぎりとめてこしかと

(若紫一七二・三)

とまる身も消えしも同じ露の世に心をくらむほどぞはかなき
(葵三〇八・二)

「かへてける」「空蟬の身」、「面影」の離れぬ「身」、「とまり」「消えし」「身」という時の「身」は、肉体つまり、日本国語大辞典にある4の「命あるからだ。生命。」という身とは、微妙に違う意味において用いられていると思われてならない。つまり、ここでははっきりとした「肉体」としての「身」が意識されているのではなく、もぬけた「から」のような漠然とした身の意識があるのではないか。以下、そういう身意識を柏木に視点を当てて考察してみたい。

三、柏木の「身」意識

若菜下巻。柏木との密通の後、女三宮が柏木への返歌として、あけくれの空にうき身は消えなん夢なりけりと見てもやむべくと、はかなげにの給ふ声の、若くをかしげなるを聞きさすやうにて出でぬる、魂は、まことに身を離れてとまりぬる心地す。(三七六・六)

空に消えるであろう、憂き身は「浮き身」でもある。女三宮にとつてまさに自分の「身」は「から」のようにうつるではない。柏木にとつても同じ。柏木は魂が身から離れ、女三宮のもとに「とまりぬる心地す」と言っている。その時の柏木自身は自分の「身」をはっきりとした肉体としての「身」ではなく、それこそ

「あくがれ出づる魂」と同化しているような「身」として感じている。つまり柏木自身は「魂」の側にもあるし、その魂の離れていく「身」の側にも、そういう両側にあることになる。まるで「から」のように「身」を意識していると言えよう。この身意識は、密通が光源氏に露見したと知るやいっそう強くなってきた。つひになほ、世にたちまふべくも覚えぬもの思ひの、ひと方ならず身にそひにたるは
(柏木十一・十四)

「もの思ひ」とは、柏木の女三宮に対する「思ひ」。柏木は、女三宮に対する自分の思ひの「ゆれ」(情念)を「たえぬ思ひ」「覚えぬもの思ひ」ということばで述懐するのだが、それはいわゆる、当時古今集でも歌われてきた「火」としての「思ひ」である。こういう火としての「思ひ」であれば、燃ゆる「思ひ」の火のもとがあるはずである。それはどこか。当然「思ふ」主体であるはずだ。ところが、この場合肝心の柏木本人の魂の在りかが、ここでもはっきりしていないのである。

あれ聞き給へ。なにの罪とも思し寄らぬに、うらなひよりけむ女の盡こそ。まことに御執の身にそひたるならば、いとほしき身もひきかへ、やんごとなくこそ、なりぬべけれ。
(柏木一五・九)

柏木の父致仕大臣はあまりの息子の弱りように、葛城山より聖だつ修験者を呼び、加持祈祷をさせた。その際、祈祷師と大臣とは、「女の盡」がついているとの話を交わした。それを耳にした柏木の述懐である。女の盡が誰のものであるかは、柏木本人が一

番よく知っている。従つて、まことに「御執」が「身」に「そひたるならば」願つてもないことであつたのだ。だが、その盡の添う身こそ、「いとほしき身」であつた。その「いとほしき身」に靈が添うたなら、その身は「やんごとなくこそ、なりぬべけれ」である。大体、「いとほし」とか、「やんごとなし」というのは、その本人が感じる実感であり、主観のほうである。ところが、こ

こでの柏木はそれを「盡」との関連ではじめて感じると言っている。つまり盡が添うか添わないかということによって、柏木は「いとほしき」とも、「やんごとなき」とも感じると言うのである。これでは添う盡の側と、盡の添う身の側との両側を柏木の主観は行き来していると考えるしかあるまい。こういう柏木の感じ方からすれば、どこを根底に柏木は自分の主観を持ち得ているのか危うくなる。言うなれば、自身というもののよつて立つ在りかをこれでは全く持ていないということと同じである。

述懐は続く。

深き過ちもなきに、見合せ奉りし夕への程より、やがて、かき乱り惑ひそめにし魂の、身にもかへらずなりにしを、かの院の内にあくがれ歩かば、結びとどめ給へ(柏木一五・十五)
「結びとどめよしたがひのつま」(葵巻)と、一部世界で歌われていたことをここで思い出すべきであろう。物の怪となつた御息所の魂も、常にとどまるべき「から(骸)」を失っているのではないか。「から」を失つた「魂」が「から」を求めて「もの」となるのではあるまいか。だが、物の怪論は論を代えることとして、

論旨をもどすと、柏木が「身にもかへらずなりにしを」と言う時、その「身」はまさに「から(骸)」である。そうして結びとどめべき「したがひのつま」を持たない「身」であつた。

従つて柏木という人物は、自分が肉体としての身を持っているとは実感していないとしか言いようがないのである。

四、おわりに

—— 柏木の身意識と「もののけ」 ——

多屋頼俊は、「もののけ」とは「もの」と「け」に分れると考へた。御息所の嫉妬は「もの」となつて、ずつと源氏の関係した女達を襲つた。だが、柏木の「魂」はそういうふうな「もののけ」とはならなかつた。当然、柏木が男性だという事もその理由にあげられよう。ただ、柏木の人物像(物語)から考えれば、柏木の魂は「もの」となつても良かつたのではなからうか。桐壺帝しかり、宇治八宮しかり、そうしてこの柏木もまた死後、靈的存在となつて人の前、夢枕に現れた。柏木の場合、光源氏に対してもしも、「恨み」を感じていたとしたならば、当然光源氏にとりつきとり殺そうとしても不思議ではなかつた。しかし、物語はそうは展開しなかつた。物語は一方的に光源氏が強い。柏木も光源氏を恨みはしなかつた。

行くへなき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ちをはなれ
じ

夕はわきてながめさせ給へ。咎め聞こえさせ給はむ人目をも、今は心やすく思しなりて、かひなきあはれをだに、たえずか

けさせ給へ

女三宮が「しぶしぶに書いて給ふ」(柏木一四・二)返歌、「たち添ひて消えやしなまし憂きことを思ひ乱るる煙くらべに」(同一七・一)に対し、「かひなきあはれ」(同一七・一〇)を感じているわけである。思えば若菜下巻の「明け暮れ」の時以来、柏木は女三宮に対し、せめて「あはれとだにの給はせよ」(若菜下三七五・一三)と女三宮の「あはれ」を願ってきた。そういう意味では、この「煙」は柏木の女三宮を思う一念の「魂」の比喩であろう。「煙」は鳥辺山の煙、すなわち火葬の煙であり、それが「空」へとのぼる、「行くへなき」(あてのない)「煙」であった。還るべき「身」のない「魂」のしるしでもある。

例を引こう。さきに引いた「かの院のうちに、あくがれ歩かは、結びとどめ給へ」とある次に、

さて、うちしめり面瘦せ給へらん御さまのおもかけに見奉る心地して思ひやられ給へば、げにあくがるらむ魂や、行きかよふらんなど、いとどしき心地も乱るれば、

(柏木一六・三)

とあるように、柏木は自分の目の前に女三宮の「面瘦せ給へらん御さま」が見えた心地がすると言う。そのとき、自分の「魂」が「げにあくがるらむ」と感じている。「ものけ」が「もの」の「け」であるならば、このような柏木の「魂」も「もの」と成り

得たと考えられはしないだろうか。

すなわち、柏木という人物はおのれ自身の肉体を実感することなく、浮遊する魂のうちにその人生を閉じたと読むことができよう。

注

- (一) 源氏物語大成と自分の所見により六百十五例を数えた。ただし、「御身」の例を含めている。
- (二) 身の上、身上の意。人生観を持って自分自身の生をふりかえつて言う。
- (三) 用例における数字は順に源氏物語大成の頁数及び行数である。以下同じ。
- (四) 源氏物語で桐壺巻から柏木巻までの用例の中で二十六例を数える。
- (五) 例えば、柏木を若菜上巻で「右衛門督の、したにわぶるよし、内侍督の物せられし」(大系若菜上二二六・一三)とみられるが、ここでは柏木個人が女三宮に「恋心」のあることを「右衛門督がそうだ」という言い方をしている。その言い方には、右衛門督としての柏木と個人としての柏木との一体の認識がみられる。だから、柏木自身が女としての女三宮に恋をしても、「まだ年いと若くて、むげにかるびたるほどなり」と評されてしまう。
- (六) 柏木巻までで九十五例を数える。
- (七) 私論「試論夢——柏木の猫の夢をどう考えるか——」(『古代

文学研究第2号一九七七年刊)

(八) 古今集の「思ひ(火)」は、恋歌で四七〇、四七七、五〇〇「下燃え」、五三四、五四四、五九六、六〇〇の七例がある。

(歌番号は小学館日本古典文学全集)

(九) 西郷信綱『詩の発生』によれば、「ものけは物として外部に投射された苦悩の表象である」とある。

以後、研究としては「家」や「王権」の問題の中で論じられてくる。

(一〇) 『源氏物語の思想』

「蓋し乳母は夕顔に付き添うている見知らぬ上臈を「もの」と判断したのである——それが「もの」であるから、其れに出遇うとその「け」のために気分が悪くなるのである。」

(十一) この歌では高田祐彦氏「身のはての想像力——柏木論断章——」(日本文学一九九四)があるが、視点を異にするものである。

※本文の引用は、岩波古典文学大系による。

また、本論は平成七年一月一六日立命館大学日本文学会談話会の席上で発表したものを基にしている。

(かんだ・ひろし) 尼崎市立尼崎高校教諭